

第5章 平成6年度山口大学構内の立会調査

第1節 吉田構内の立会調査

1 経済学部商品資料館仮設電柱設置工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内

調査期間 平成6年6月20日

調査面積 約5m²

調査結果 経済学部商品資料館の新営に伴い、工事用電源を引き込むための仮設電柱の設置が必要となった。電柱は国際交流会館敷地内に2本（A・B地点）、学内道路に平行して3本（C～E地点）の計5本の設置が予定された。電柱の設置には直径約50cm、深さ約1.0mの掘削を行うため、埋蔵文化財資料館が立会調査を実施した。

国際交流会館敷地は、西側に隣接した人文学部前駐車場より一段高くなっているが、これは国際交流会館建設時の造成によるものである。このため、A・B地点の掘削はいずれも造成土の範囲内にとどまった。D・E地点は、ハンドボール場北辺の傾斜面にあたる。現地表下80～90cmまでは造成土であり、造成土の直下は地山であった。C地点は、厚さ約30cmの造成土の下に、約40cmの厚さで水田耕土が残されており、その直下が地山となる。

立会調査の結果、国際交流会館及びハンドボール場の周辺は、本学統合移転時に水田を削平した後、厚く客土していたことが判明した。

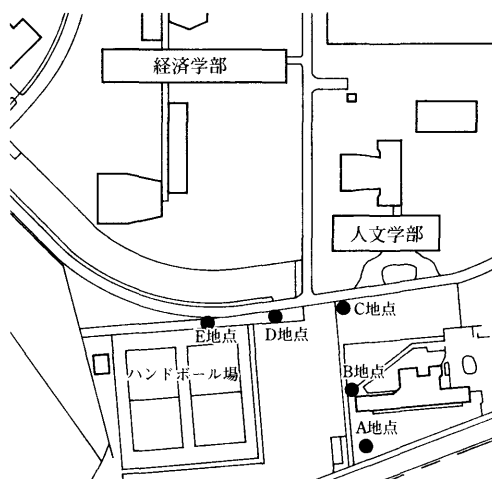


Fig.107 調査区位置図

2 人文学部前駐車場整備工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内

調査期間 平成6年7月27日

調査面積 約6㎡

調査結果 人文学部前駐車場の舗装整備が計画された。工事は、従来のバラス敷からアスファルト舗装にし、駐車場の周囲に排水のための側溝を設置するというものであった。U字溝の埋設には幅50cm、深さ54cmの掘削を伴った。このため、埋蔵文化財資料館が立会調査を実施したが、本地区は本学統合移転時の造成土が厚く、深さ50cm程度の掘削では旧地表すら確認することはできなかった。関連部局の了解を得て、4地点の部分的な深掘りを行い、造成土以下の土層堆積状況を確認した。

A・B地点は現地表下0.9～1.0mまで造成土であり、その下に水田耕土の上面を検出した。C地点は現地表下約50cmまでは造成土である。造成土の下には厚さ約10cmの攪乱層があり、その直下に厚さ約20cmの水田耕土があった。地山の緑色粘土はこの水田耕土直下、現地表下約80cmで検出した。D地点は現地表下約70cmまで造成土であり、その直下に厚さ約30cmの水田耕土があった。地山の緑色粘土はこの水田耕土直下、現地表下約1.0mで検出した。

立会調査の結果、人文学部前駐車場は厚く客土されていることが判明した。造成土は特に北から南へと厚さを増している。また、造成土の下に水田耕土が残存していることも確認できた。

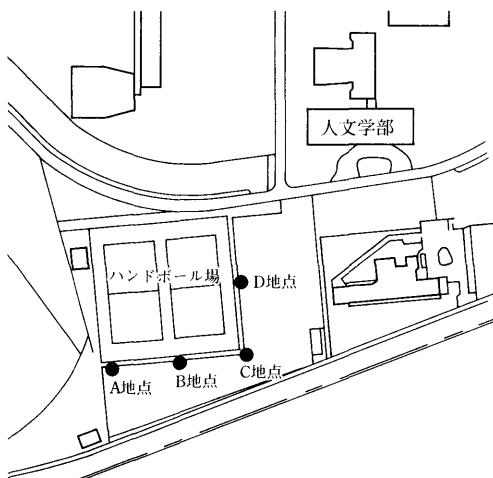


Fig.108 調査区位置図

3 テニスコート改修工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内

調査期間 平成6年9月5日

調査面積 約15m²

調査結果 工事はテニスコートを夜間も使用可能にするための照明施設を設置するものである。照明塔は小型であり、基礎部分を1.0m×1.0mの範囲で、深さ約1.0mまで掘り下げるものであった。ただし数は多く、54ヶ所の設置が予定された。このため、54ヶ所のうち、テニスコートの周囲部分となるAからOの15地点について立会調査を行い、土層の堆積状況を確認した。

立会調査の結果、テニスコートの南半側は現地表下50～80cmで地山が検出されるのに対し、北半側は現地表下1.0mまでは本学統合移転時の造成土内であることが判明した。九田川に向かって地形が落ち込むのであろう。いずれの地点においても、水田耕土が造成土直下に厚さ10～40cmで残存していた。地山は緑灰色粘土であるが厚さは10cm程と薄く、地点によっては水田耕作による削平のため緑灰色粘土が消滅し、その下の暗褐色粘土が地山面となる場合もあった。また、薄い遺物包含層の可能性のある土層を部分的に認めたが、掘削面積が狭いため明確にできなかった。

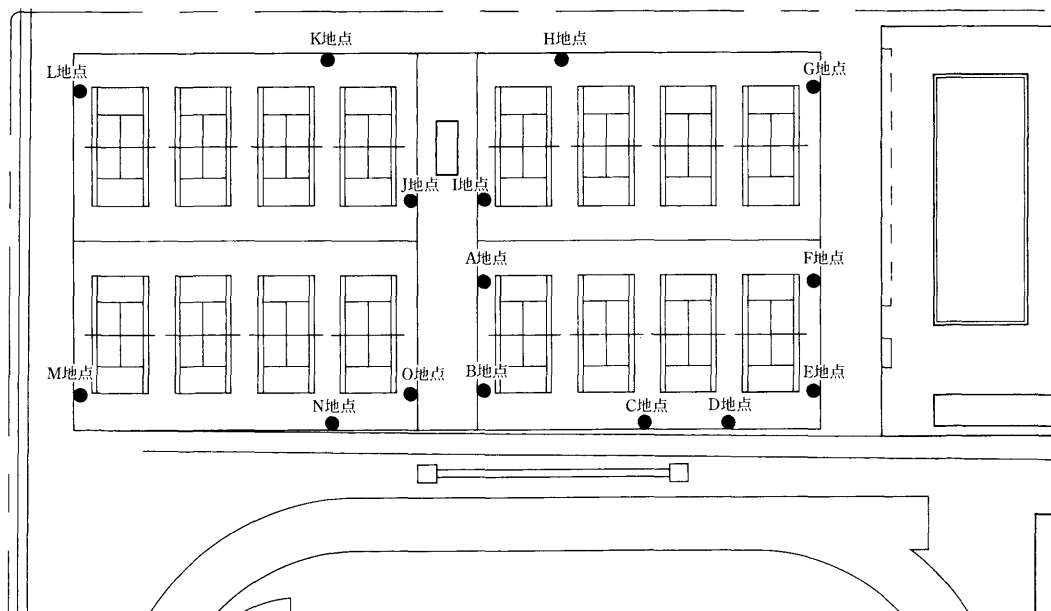


Fig.109 調査区位置図

4 教育学部附属養護学校生活訓練施設棟新営工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内

調査期間 平成6年9月26日

調査面積 約16m²

調査結果 附属養護学校の生活訓練棟の新営工事に伴い、電気配線を埋設することとなった。電気配線の埋設自体は、現地表からの掘削が約50cmと浅いものであるが、作業用の縦坑であるハンドホール部分の7ヶ所は、設置のために1.5m×1.5mの範囲で深さ1.0mの掘削が必要であった。電気配線埋設の掘削については、従前の調査データから埋蔵文化財に支障のないことが予想されたため、深いハンドホール部分の7ヶ所について、立会調査により地下の状態把握を行った。

立会調査の結果、養護学校敷地内においては、浅い地点で約50cm、深い地点では厚さ1m以上に渡って客土されていることが判明した。また、造成土の直下には、水田耕土が残存していることも判明した。地山は黒～茶色系の粘土であった。

今回の調査では、遺物包含層及び遺構は確認できなかった。ハンドホール部分の調査により、電気配線の埋設工事は埋蔵文化財に支障のないことが判明し、工事はそのまま進められた。

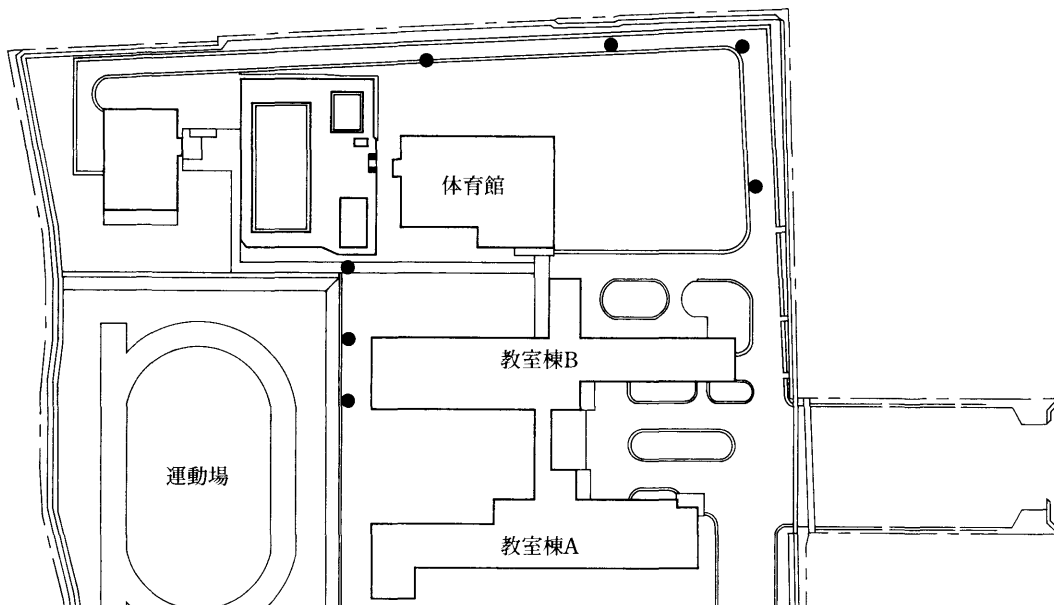


Fig.110 調査区位置図

5 教育学部附属養護学校生活排水管改修工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内

調査期間 平成6年8月2日

調査面積 約2m²

調査結果 養護学校からの生活排水管が、市道を挟んだ大学グラウンド側で、劣化による漏水を起こしており、排水管を付け替えるために掘削を行うという工事であった。

この場所は、陸上競技場からラグビー・サッカー場へ向かって一段高くなる境にあたり、深さ約30cmの掘削では埋蔵文化財に影響がないものと推測された。立会調査の結果、当初の予想通り掘削は造成土内にとどまった。

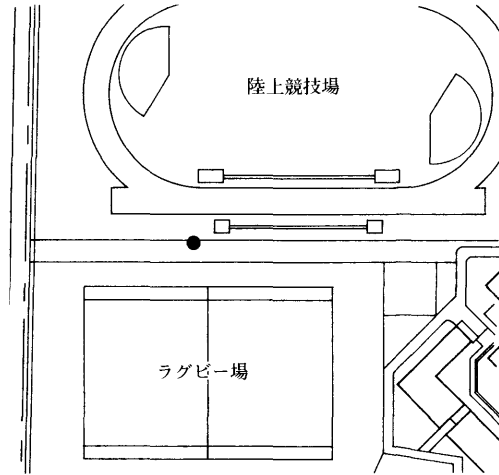


Fig.111 調査区位置図

6 陸上競技場整備（透水管埋設）工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内

調査期間 平成6年10月7日

調査面積 約200m²

調査結果 陸上競技場透水管工事は、グラウンド中央を貫く主幹と、その両脇に3本ずつ取り付いた計6本の枝部分からなる矢羽状の管路を、幅約1.0m、深さ約40cmの規模で掘削するものであった。

立会調査の結果、現地表下約15cmまではグラウンドのマサ土であり、工事掘削に必要な現地表下40cmは水田耕土の範囲であることを確認した。このため、埋蔵文化財に影響はなく、工事は続行された。

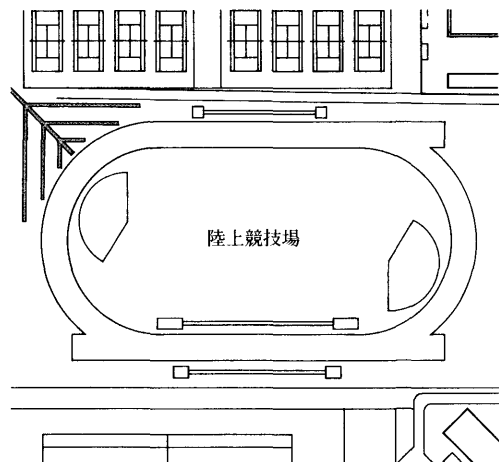


Fig.112 調査区位置図

7 ハンドボール場改修(プレハブ設置)工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内

調査期間 平成6年10月20日

調査面積 約30m²

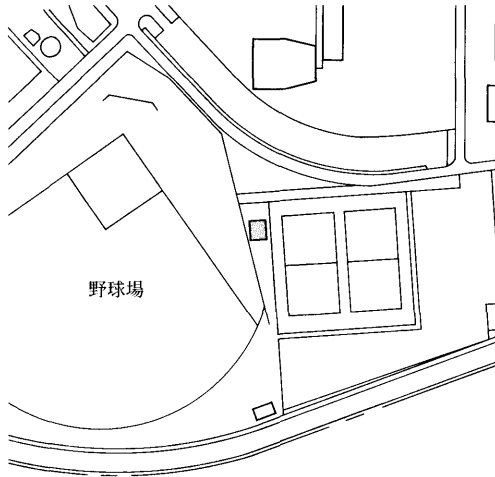


Fig.113 調査区位置図

調査結果 工事は、吉田構内の南部に所在するハンドボール場にプレハブ建物を設置するものであった。基礎工事は現地表面から45cmの掘削であり、現状でも造成土により周囲から一段高くなっているハンドボール場においては、埋蔵文化財への影響はないものと予想された。

立会調査の結果、掘削は造成土内にとどまり、工事は続行された。

8 野球場フェンス改修工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内

調査期間 平成6年10月20日

調査面積 約3m²

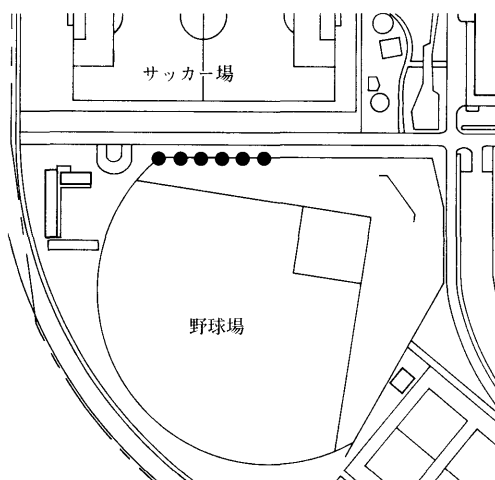


Fig.114 調査区位置図

調査結果 野球場のフェンスが老朽化のため倒壊しつつあり、付け替えが必要となった。これに伴い、支柱の基礎部分6ヶ所が付け替えられることとなった。

工事は、基礎を埋設するにあたり、現地表面から約60cmの深さまで掘削するものであった。

立会調査の結果、いずれの地点も造成土の範囲内であった。埋蔵文化財に影響はなく、工事は続行された。

9 基幹環境整備（ボイラー室配電盤設置）工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内

調査期間 平成6年10月25日

調査面積 約4m²

調査結果 吉田構内の北東寄りに所在するボイラー室の改装が行われるにあたり、建物外部の2ヶ所に、配電盤（アース盤）の埋設が必要となった。工事は、現地表下約1.5mの掘削を伴うものであった。

立会調査の結果、現地表下約60cmで河川堆積土と考えられる暗青色粘質土を検出した。河川は深さ約60cmを測り、その下は地山の明青灰色砂礫であった。河川から時期不明の土師器が2片出土した。

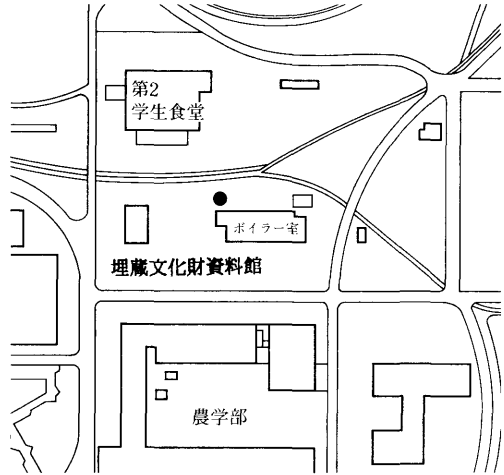


Fig.115 調査区位置図

10 九田川河川局部改良工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内

調査期間 平成6年10月28日・平成7年1月11日

調査面積 約100m²

調査結果 平成5年度から行われている山口県による九田川の護岸改修工事の続きである。平成5年度の調査では、遺物も遺構も検出していない。平成6年度はテニスコート北東側からクラブハウス前までが工区となっている。

立会調査の結果、水田層の上に造成土が厚さ約1.5mに渡って存在することが明らかとなった。また、調査範囲内では、現地表下1.8～2.0mに地山の黒褐色粘土が確認できた。

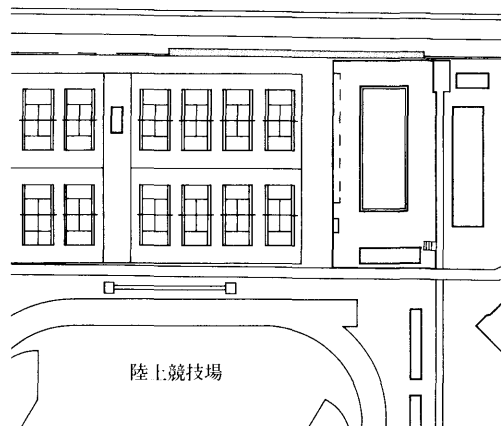


Fig.116 調査区位置図

11 第2屋内運動場仮設電柱設置工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内

調査期間 平成6年11月11日

調査面積 約0.5m²

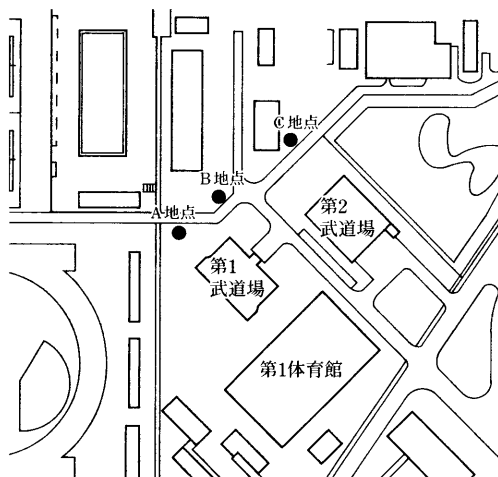


Fig.117 調査区位置図

調査結果 第2屋内運動場の新営に伴い、工用電源を引き込むために2本の仮設電柱が必要となり、掘削を行うものであった。

現地表から約90cmほど掘削したが、本学統合移転時の造成土の範囲内であった。第2屋内運動場近辺は造成土が厚いことが推測される。

12 教養部水道管破裂修理工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内

調査期間 平成6年11月15日

調査面積 約2m²

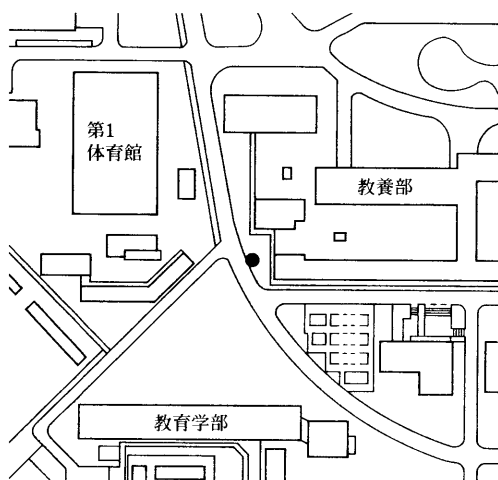


Fig.118 調査区位置図

調査結果 教養部講義実験棟の南西隅側に埋設されていた給水管が、老朽化により漏水し、道路上に水が溢れ出した。復旧工事に際して立会調査を実施した。

現地表下80cmまでは、表土及び統合移転時の造成土、約80cmから掘削深度の約1mまでは黄褐色粘土の地山を検出した。一部暗褐色粘土の部分があり、遺構埋土の可能性も考えられたが、漏水のため確定はできなかった。遺物は出土していない。

13 グランド屋外照明施設配線埋設工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内

調査期間 平成6年12月15日

調査面積 約150m²

調査結果 グランド照明施設の配線工事は、高圧線のため最低でも現地表下50cmの掘削が必要であった。配線は極力、側溝等の既掘削部分に沿わせる措置が取られた。

グラウンド南西部の県道沿いは遺物包含層が深く問題はなかったが、北西部の教育学部棟側では、防球ネット基礎の既掘削部分に沿わせたにもかかわらず、一部の地点で現地表下約10cmに遺物包含層を確認した。遺物包含層は、厚さ約25cmであった。

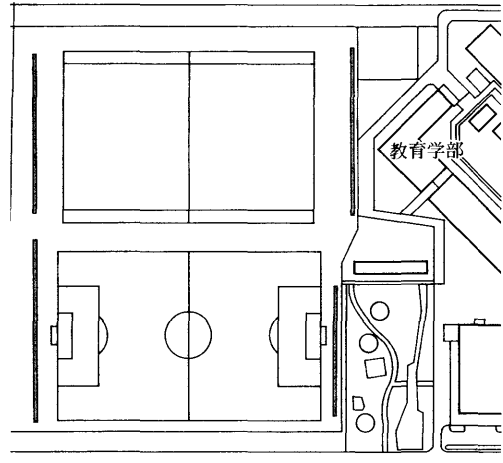


Fig.119 調査区位置図

14 公共下水道接続(教育学部附属養護学校プール排水施設設置)工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内

調査期間 平成6年12月9日・平成7年1月20日

調査面積 約4m²

調査結果 山口市による公共下水道整備に伴い、プール用の排水設備が更新されることになった。調査は、市公共下水道接続用柵の設置予定地を2m×2mの規模で、現地表下1.5mの掘削深度で実施した。樹木の除去も伴ったが、調査地点は養護学校敷地の北西辺の擁壁に接する部分にあたるため、工事は過去の擁壁工事による攪乱土の範囲内にとどまった。

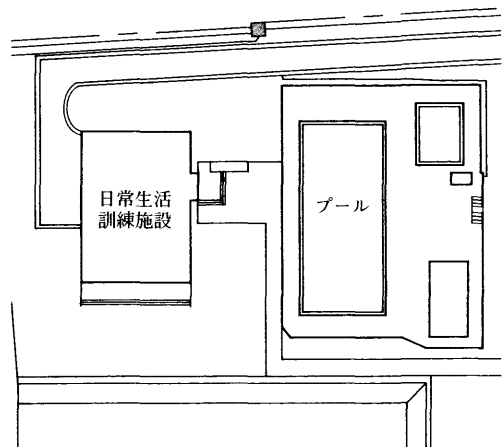


Fig.120 調査区位置図

15 サークル棟給水管埋設工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内
調査期間 平成6年12月16日
調査面積 約1m²

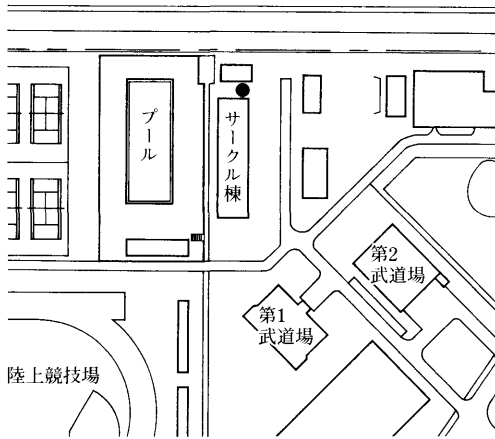


Fig.121 調査区位置図

調査結果 吉田構内北西部に所在するサークル棟の給水管が、老朽化により漏水を起こしたため、年度当初計画にはなかった給水管埋設工事が急遽行われることになった。掘削深度は現地地表下約60cmであり、付近の調査状況から本学統合移転時の造成土内であることが予想された。

立会調査の結果、掘削範囲は造成土内にとどまったため埋蔵文化財には支障がないと判断し、工事は続行された。

16 プール新営給水管埋設工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内
調査期間 平成6年12月26日・平成7年2月15日
調査面積 約10m²

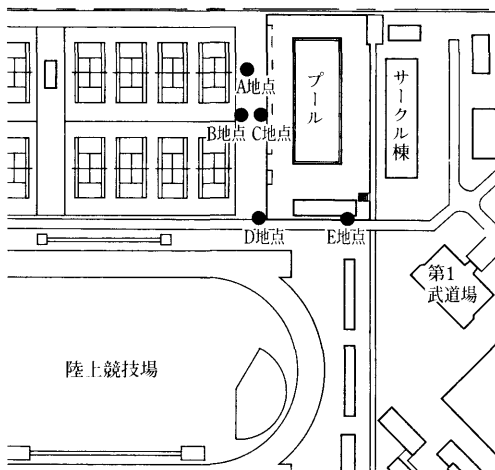


Fig.122 調査区位置図

調査結果 給水管埋設にあたり管路部分の調査を実施した。表土及び造成土の厚さは過去の工事の影響で不均一である。それ以下は概ね同様の層序を示し、約40～80cm以下で約10～15cm程度の暗灰色の水田耕土、約5cmの暗黄灰色の水田床土を経て、暗黄灰シルトまたは黒褐色土の地山となる。地山はプール側からテニスコート側に向かって若干傾斜して低くなっていると推察できる。遺構・遺物は検出できなかった。

17 公共下水道接続工事(汚水管雨水排水施設設置)に伴う立会調査

調査地区 吉田構内

調査期間 平成7年3月3日

調査面積 約6㎡

調査結果 山口市による公共下水道整備に伴い、接続に先行して、陸上競技場南西辺のテニスコート寄りに吉田構内からの雨水排水施設連結用の枡が設置されることになった。現地表下約160cmより下が河川堆積層で、上層から暗黄茶褐色粘質土、暗黄茶褐色粘質砂、暗灰色砂、黒灰褐色砂礫、青緑色粘土となる。現地表下約140cmと約180cmの付近で、弥生時代から古墳時代にかけての土器が2点出土した。

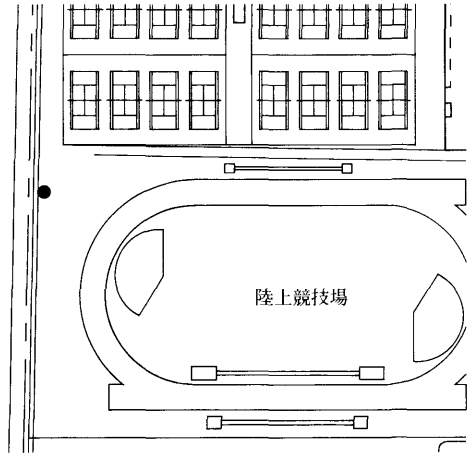


Fig.123 調査区位置図

18 教育学部スロープ設置(音楽棟)工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内

調査期間 平成7年3月17日

調査面積 約10㎡

調査結果 バリアフリー化のためのスロープ設置工事である。根切り掘削は既設建物に直交し、約1m×10m、掘削深度は1mに達した。

現地表下65～100cmまでは表土及び本学統合移転時の造成土であるが、一部に約65～100cmで水田耕土及び床土と考えられる黒灰色粘質土、黄灰色粘質土を検出した。黄灰色粘質土は地山の可能性もあるが、調査範囲内は攪乱が著しく、確定は困難であった。遺構・遺物は検出できなかった。

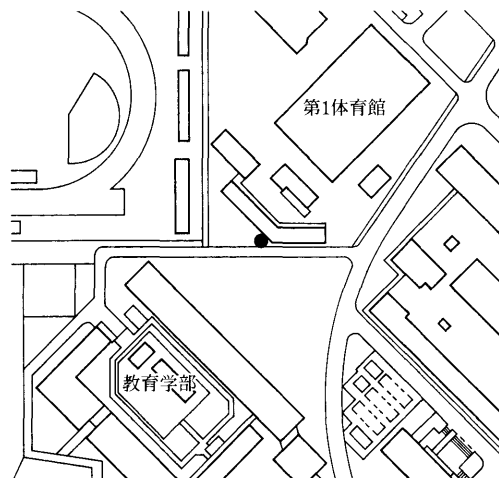


Fig.124 調査区位置図